920 字以内

4/30/2002

『甲斐ヶ嶺』2002 年 7 月号巻頭言

縦横

日本国中地方都市の中心商店街は瀕死の重傷のようだ．中でも先進地として群馬県の高崎市が有名だったが，甲府市も負けず劣らず重態だ．中核的商業施設の経営までが不振になって，あまつさえ乏しい魅力を徹底的に失ってしまいかねない事態に直面している．どうしてこんなことになったのであろう．回復する手だては無いのだろうか．

ところで，都市の中心部というのは「祝祭性」という「記号」によって成り立っている．特に，「ケ」から「ハレ」への交換の徹底的にバーチャルな空間，それが都市，特に消費都市の中心部の役割なのだ．甲府の中心市街地はそういう記号論的意味に鈍感に過ぎたのではなかったか．

私たちの普段の現実生活は「一切皆苦」，決してバーチャルなものなどではあり得ないリアリティである．それが仮に生き甲斐であってさえも，それに精を出していると「ケ」が充満してくる．それを「ハレ」に換えるために週末や休日には街にくり出していくのである．ショッピング・映画・演劇・音楽会・ボランティア活動・友人との語らい等々，すべてが日常の「ケ」を忘れて明日に向かって再起するための「ハレ」の行動である．だからこれは，日常的な合理的行動であってはならないのである．

合理的な行動の最たるものは時間の短縮である．時間の短縮に必要な手段は車である．公共交通機関を全く育てなかった地方都市では結局のところ自家用車に頼ることとなる．つまり，中心市街地といえども「合理的判断」のもとにモータリゼーションに迎合したのである．その結果，人々は「ケ」を晴らすにも合理的な手段を選んでしまう．結果は「ハレ」を演出すべき休日にも交通渋滞し，それは普段の「ケ」と全く同一の情景なのだから，「ハレ」には至れない．結果，郊外のショッピングモールへと足が向いてしまうことになって衰退を加速する．

事実，甲府市中心商店街を歩いてみればあきれるばかりにがら空きの駐車場が完備している．本来，「ハレ」のために気取って歩くべき空間に無機質な駐車場，街づくりを真剣に考えてこなかった人々の不努力が透けて見える．しかし，ようやく外から多くの NPO 等が中心商店街再生の活動を始めた．多彩な「ハレ」のソフトを用意している．期待できる．